

第2回ワークショップにおける将来の方向性 一覧

テーマ	将来の方向
1 子育て・教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皆が楽しめる、子どもが来なくなる学童づくり ・ 遊び場がたくさんあり子どもたちが自由に遊べる環境 ・ 大人と交流しながら地域で子どもが育ち、その子どもたちが大人になったら地域の子どもを育てる ・ 小中学生や高校生が交流し、活躍できる地域にする ・ いろいろな地域で（様々な）活躍ができる子 ・ 自分で考えて行動する子 ・ ITやゲームとうまくつきあっていく子 ・ 多様な価値観を持てる子 ・ 自分で物事を考えられる子 ・ 未来の子どもの可能性を広げる教育環境をつくる ・ たくさんの人の中で力を発揮できる子ども ・ 元気・活発で枠にはまりすぎない子 ・ コミュニケーションのとれる子 ・ 地域に思い入れのある子 ・ 働きながらの子育てを充実 ・ キャリア教育が日本一進んでいるまちにする ・ 芦屋の個性、強みを活かした教育で、芦屋に愛着を持ち、将来芦屋に返してくれる子どもを育てる
2 景観・ 居住環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ 色の統一、アースカラー ・ 無電柱化の長所と短所のバランス ・ スクラップ&ビルドではなく、リノベーションで古くて良いものを活かし、まちの価値を高める ・ 芦屋にあったサイズやデザインのマンションづくりで新しい人も受け入れる ・ 南北の規制のバランス ・ 自然との共生 ・ 市民の感性と行動力を生かし、育て、自然やまちなみの美しさなどを維持管理していく
3 自然	<ul style="list-style-type: none"> ・ 山、川、海が揃った芦屋の自然を活かした交流の場を生み出し、魅力を発信 ・ 芦屋川を人々の賑わいの場として活用 ・ 防災の観点を持ちながら、市民の暮らしと折り合うように自然の維持管理を進める
4 文化	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民が楽しめる機会づくり ・ 施設の連携を進め、市民が参加し、楽しめる美術館・博物館にする ・ 芦響の伝統をもっと大切にする ・ 芦屋の著名人を活用し、発信する ・ 小さいころから文化にふれる ・ 参画と協力の仕組み ・ 市民が文化を楽しみながら文化を育てられるように ・ 伝統、文化を市民へ発信しまちの魅力づくりにつなげ、お金持ち一辺倒の芦屋へのイメージを変える ・ 市民や来訪者が芦屋の文化とまちを併せて楽しむことができる仕組みやしかけをつくる

テーマ	将来の方向
5 安全・安心	<ul style="list-style-type: none"> ・ 忘れないように、危険性を伝えていく ・ 大人に災害のこと、阪神・淡路大震災のことを伝える ・ 市民全体に知る機会を提供する ・ 人の命を守るためのハード面はお金をかけても整備する ・ ハードはお金と時間がかかるので、ソフト面にすぐにとりかかる ・ 継続的に芦屋らしさを保つため、技術で新しい芦屋らしさをつくる ・ 顔が見える・顔が分かる状態にする
6 コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・ まちの縁側のような集える場を作り、人々の繋がりをつくるきっかけとする ・ 行政と住民の間をつなぐ開かれた自治会にする ・ 誰もが参加しやすい、負担のかからない自治会の運営 ・ 定住していない人や若い人でも入りやすいコミュニティづくり ・ 大学生と子どもとの世代間交流 ・ 大人の部活動など、やりたいことで集まる世代をこえたコミュニティづくり
7 行政施策	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市民も市の財政状況を理解する必要がある ・ 市は役所内の横のつながりを深めるとともに、住民の声をきき、透明な意思決定プロセスを踏む ・ 市がどのような方向に進もうとしているのかもっとわかりやすくするとともに市民にも広く周知する ・ 市の広報力を活かし、市民と市がまちづくり情報を共有する ・ 市民と市職員が気軽に話し合える関係性/場をもつ ・ 市職員は市民の声に耳をかたむけ、市民は市を理解する姿勢を持つ ・ 行政・議員・自治会・一般市民との関係の強化
8 生活利便	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誰もが公共施設を便利に利用できる ・ 移動手段の充実で、地域内を移動できる便利なまちに ・ 古いものを残しながら、安全・安心・暮らしを支える
9 商業・産業	<ul style="list-style-type: none"> ・ 芦屋らしい小さい店、個人店が活躍できる ・ 商業と市がタイアップして JR 芦屋駅を中心として回遊できるまちにする ・ 財政を豊かにするため、産業を取り込む意識をみんながもつ ・ 芦屋らしい産業がある ・ 高齢者や主婦など、働きたい人がそれぞれのスタイルで活躍できるまち ・ 個人の商店、起業を応援できるまち
10 共生	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な施設（障がい、高齢、保育所）を地域の1つの資源として活用 ・ ボランティアしたい人とふれあいを求める人をつなぐ ・ 障がい者や高齢者の長所を活かして、居場所や雇用の場など活躍できる場がある ・ みんなが活用できる場（施設）となるようにする ・ 学びや出会いにより、自分と異なるものを知り、理解、共感する ・ いろいろなバックグラウンドの人が、共生されている ・ 文化との共生でアーティストが集まるなど、多文化の人が暮らしやすいまち ・ 行政が情報受発信の HUB になり、市民や民間企業、地域組織との協働を深める ・ 「共生のまち」をブランドにし、地域の価値を高める